



日経ビジネスに見る「経済先読み・解説」 223号

経営コンサルタント 栗田 剛志 14.1.6

発行元：m9コンサルティング

<http://www.m9consulting.biz>

配信できなかったメルマガがあるため、3本続けての配信となります。

このメールマガジンは、今週発売となる日経ビジネスの中から気になった記事を選び、私なりの視点で考えたことについてお伝えするものです。会社での朝礼時のネタ、取引先との会話、同僚との間の話題づくりにお役に立てたらと思い、毎週月曜日に発信いたします。

「日経ビジネス2014年1月6日号 no.1723
『THE100～2014日本の主役』より

【新たなる時代】

年が明け、なんとなくこれまでとは違うムードが漂っています。昨年と比べると株価は高い水準を維持しています。企業の業績はよく、消費も活発だと報道されています。

消費税の増税やTPP、原発問題など課題は山積しており避けて通ることはできません。それでも、昨年までは下を向くしかできなかったものが、「どんと来い！」と上を向いていられます。

さて、今年はどんな年になるのでしょうか。

日経ビジネス新春第1号の特集では、これからの日本を変えそうな可能性を秘めた人物を100名選出しています。

その中でも、私が強く期待を寄せる人物を5名選んでみました。

この方々が、どんな良いニュースを運んでくれるのか。とても楽しみです。

私の趣味のひとつに自転車があります。ロードバイクという、何段ものギアがあってフレームはできる限り軽量化し、ペダルに固定されるシューズを履いて踏む力のみならず引き上げる力をも使って車輪を回す自転車です。

そのロードバイクに乗って、ウンウン唸りながら山を登ります。途中で投げ出したくなることに何度も遭遇しながらも100km以上を走破すると、何とも言えない達成感を味わうことができます。

私の今年の目標のひとつに「ヒルクライム」の大会に出場することがあります。これまでは、ロングライドといって100kmほどの長距離を休憩を入れながら走破する大会に参加していたのですが、競争ではないためそこに順位はありません。

今年は、競技志向を取り入れ、タイムや順位にこだわっていきたくと思っています。

そんな自転車競技における日本のエースが「新城幸也」です。フランスの山岳地帯を約3500km、3週間かけて駆け抜ける世界最高峰のロードレースである「ツール・ド・フランス」にて日本人で初めて完走した選手です。

今までの私にとっての自転車とは、いわゆるママチャリのこと、買い物や遊びのツールでしかなかったのですが、ロードバイクとの出会いによって、ヨーロッパの持つ自転車文化に触れることができました。

新城選手の活躍によって、一人でも多くの人が自転車の魅力に気づいてほしいと思います。

私が家電を購入する際に、必ず一番の選択肢に入るのが「ソニー」です。品質、性能、価格のすべてにおいて最高ランクのブランドであり、世に出る製品にいつも驚かされ、ソニーを好むことがライフスタイルにつながっていました。

ソニーそのものがダントツであり、ソニーを好む私もダントツである気にさせてくれたのです。

残念ながらこれは「かつて」の話です。家電量販店の売り場を覗いても、以前であればすぐにソニーの商品を見つけることができたのですが、今は他のメーカーとの明確な違いを打ち出すことができずに埋没してしまっています。

しかし、ソニー社長兼CEOの「平井一夫」こそが、そんなソニーを変えてくれる人だと信じています。

サムスンやアップルにコテンパンにやられ窮地から脱することができない日本の弱電メーカーの中で、必ず息を吹き返してくれると期待しています。

今年こそ、かつてのようなダントツぶりを取り戻してくれるはずです。

京都西陣織の老舗である「細尾」の取締役である「細尾真孝」は、大学卒業後、音楽活動を経て、大手ジュエリーメーカーに入社しました。退職後にフィレンツェに留学し、2008年に家業に戻りました。2009年から新規事業を担当し、帯の技術、素材をベースにしたファブリックを海外に向けて展開しています。

建築家、ディオールやシャネルといった店舗に採用されるなど、伝統工芸の域に留まらない取り組みを行っています。

私は、足利銘仙、ヘンプの織物、藍染、レースなど、様々な伝統工芸の支援を行っているのですが、その技術の高さや美しさの可能性を信じていかなければなりません。

細尾氏のように、伝統に縛られることなく、モダンな感性を備えることこそが、伝統工芸の生き残る道なのです。ルイ・ヴィトンやシャネル、ディオールといった世界のビッグメゾンから評価を受け続けることこそ、日本の伝統産業を変える起爆剤になると感じています。

正直、「またこの人が総理大臣か」と不安に思いました。

民主党に限界を感じつつも、自民党に戻ったところで何が変わるのか、さっぱりわかりませんでした。

一度さじを投げた人が、ノコノコと総理の椅子に座れるほど日本は甘っちょろい国なのかと、恥ずかしく思ったことも事実です。

それが、アベノミクスの好結果は明らかであり、斬新な政策を次々と打ち出し、オリンピックまで引っ張ってきました。

世の中、分からないものです。「安倍晋三」がすごいのか、それともラッキーの連続で今に至るのか。

こうなった以上、「実はすげーんじゃん」となってほしいです。

昨年、「チーム・ジャパン」は、ブエノスアイレスで2020年の東京五輪を勝ち取りました。日本の良いところに、世界が期待を寄せたのです。

今年は、もうすぐ始まるソチ五輪、6月のブラジルワールドカップ、可夢偉のF1復帰、田中マー君のメジャーデビューと、日本人および日本人のチームが世界で活躍する機会がたくさんあります。

日本だから、日本人だからできることを世界に知らしめるのです。

今年もいたるところで、「チーム・ジャパン」が活躍します。

新たな時代が幕を開けます。